

# 新しき吃音者像

## — 『アサッテの人』論 —

橋本雄太

立命館大学大学院先端総合学術研究科

synd0315@gmail.com

井上裕太

無所属

(大阪府立大学人間社会学研究科博士前期課程修了)

### The New Image of Stutterer in *Asatte no Hito* (The person of the day after tomorrow)

YUTA Hashimoto

(Ritsumeikan University)

YUTA Inoue

(Independence)

**Keywords:** *Stutterer, Stuttering, Tetsushi Suwa, Asatte no Hito (The person of the day after tomorrow)*

#### 1 はじめに

本論文では、三島由紀夫が著した『金閣寺』と諏訪哲史が著した『アサッテの人』に描かれた吃音者像とを比較することにより、『アサッテの人』で描かれた吃音者像の新しさを考察していく。その際、両者の吃音者がどのように、またどのような位置づけで描かれているのかに注目していく。

まずは、『金閣寺』と『アサッテの人』の2作品の概要を確認しておく。三島由紀夫の『金閣寺』は、1950年7月2日、金閣寺の徒弟である林承賢によって国宝の金閣が放火された事件を題材にしている。放火犯林承賢は「どもるせいもあって級友とはほとんど口をきかず、ひとり考え込む内攻性の人」<sup>1)</sup>であり、吃音者であったと新聞記事に書かれている。『金閣寺』の語り手の溝口は吃音者であり、自己表現の際に障害を感じていた。溝口が感じていた障害とは、コミュニケーションの場面だけではなく、あることが

らに対しての感情をも遮る壁として描かれている（三島 1956：11-46）．そこで考えなくてはいけないのは、『金閣寺』という作品は吃りの語り手が語っている体裁をとっているのに、文全体が吃っているということになるはずだが、セリフ以外は吃っていないということである（大澤 2018：137）<sup>2)</sup>．

一方、諏訪哲史の『アサッテの人』は『群像』2007年6月号に、第50回群像新人文学賞受賞作として掲載された．この作品は、吃音による疎外感から厭世的になり、ついには行方知らずになった叔父のことや、叔父のさまざまな奇行について、叔父の残した日記を手掛かりにし、作家の「私」が語っていく小説である．この作品は後に、第137回芥川龍之介賞を受賞し、世間の注目を浴びた．

『アサッテの人』はこれまで主に、小説が持つ構造的性に注目して論じられてきた（熊倉 2008、疋田 2019）．その中でも疋田は、「アサッテ」という言葉を、「小説の『定型』からの逸脱の可能性を逆説的に体現して見せた」（疋田 2019：77）ものとしてとらえている．小説の構造を論じることで、『アサッテの人』のテキストの有機性や読まれ方の可能性を示すことはできる．すなわち『アサッテの人』は、語り手である私が、読者に向かって自身の語りについての解釈や釈明を述べている<sup>3)</sup>、メタフィクション的な構造をとっている．その自己言及的な書かれ方について論じているのが、疋田である．

しかし本論文ではその方法ではなく、作品に描かれた吃音者像の新しさに言及するため、叔父の吃音と「アサッテ」の関連性を時間と空間という視点から考察をする．そしてその関連性から、『アサッテの人』の新しき吃音者像について分析していく．

## 2 文学に描かれた吃音者と当事者運動

吃音者が描かれている文学作品はいくつかある<sup>4)</sup>．その中でも今回は、三島由紀夫の『金閣寺』と諏訪哲史の『アサッテの人』に描かれたそれぞれの吃音者を比較する．その中でも特に、両者の自我表象に注目する．それはすなわち、自身の吃音とどのように付き合っているのか、ということを見てゆくことになる．

まず、『金閣寺』に描かれている溝口の吃音について、三島由紀夫の研究を専門とする佐藤秀明は、吃音とは「発話しようとした瞬間から、発話が完了するまでの時間が相対的に長い人の発話現象を指す」（佐藤 2000：133）としている．さらに、『金閣寺』という作品を「他者を内在化して書かれた手記、あるいは柏木<sup>5)</sup>への対話を含む手記」（佐藤 2000：133）と捉えている．さらに、「他者の内在化」について、以下のように述べている．

今になって記すのは気がひけるが、実は「私」には、親しく語りかける相手が一人だけいた．戦時下、敗戦、女との失敗……その都度、いや毎日、「私」は語りかけていた．金閣である．「私」は内在化していた「心象の金閣」を行為の対象として括り出し、それに代えて他者を組み入れたのである．生きるために、吃音が治癒したかどうか

かは、分からない。しかし内在化した他者を持つかぎり、「私」はことばを発することができる。

(佐藤 2000 : 133, 傍点原文以下同様)

溝口は「内在化した他者」には吃らずに語りかけられる。声に出していないから吃らないのも当然である。しかし、「感情にも吃音があったのだ」(三島 1956 : 46) というように、心の中の言葉にも吃音があった。それにもかかわらず、金閣や柏木に向って心の中で語りかけるときは通常の吃音も感情の吃音もでていないのは、佐藤の指摘通り、他者を内在化したからこそであろう。

佐藤の指摘通り、『金閣寺』の語り手は、金閣や柏木、それらに加えて吃音者である自分自身をも内在化していると考えられる。それはつまり「吃っていない私」が「吃っている私」を内在化しているということである。すなわち、「吃っていない私」＝語り手としての私が、「吃っている私」＝実際の私を語っているのである。そこでは、内在化という作用が行われているからこそ、文全体が吃るということはおきていない。そしてその語りは初めから終わりまで徹底されている。三島は『金閣寺』という作品で、吃音者を描く文体を、つまり「吃っていない私」が「吃っている私」を内在化しているという文体を意識的に徹底したということがここで確認できる。

『金閣寺』が発表されて 10 年後、吃音者の当事者団体である言友会が、伊藤伸二を中心に発足された。伊藤は幼少期から吃音に苦しみながら、それを治すために吃音矯正所に通った。だが吃音矯正所では、必死で治す努力をしたにも関わらず、吃音は治らなかった。1960 年代から 70 年代に行われていた吃音矯正法は、その効果が一時的であったといわれている。渡辺によると当時の吃音矯正の方法は、ディストラクション効果と呼ばれるものであった。これは外国語を話すように通常とは異なる発話をすることで、一時的に吃音症状をなくならせるというアプローチである。ただし、現在の吃音研究においては、ディストラクション効果によって一時的に吃音症状がなくなったとはいえ、その方法は吃音の治療方法とはみなされていない(渡辺 2004 : 30)。この吃音矯正法により吃音矯正そのものに不信感を抱く者が出てきたのが 1960 年代から 70 年代である。そこで伊藤は吃音矯正や情報共有を目的とした言友会を発足した。その発足した背景については「当時の社会運動の影響を挙げることができるだろう。折しも、1960 年代は、日米安保問題などを通じて学生を中心とした社会運動が盛んな時期だった」(渡辺 2007 : 103) と渡辺は説明している。そして発足から 10 年後、1976 年には伊藤伸二らが中心となって「吃音者宣言」を発表する。この宣言によって言友会は、活動方針を大きく方向転換することになった。それは、無理な矯正をやめること、すなわち、治療が強い、治さなくてはいけない、というような強迫観念を取り去ることである。そこで、吃音矯正を否定するような考え方が「吃音者宣言」という形で生れたのである。渡辺は「吃音者宣言」について「否定的な『どもり』をとらえなおそうとすることを宣言する

だけにとどまらず、この宣言にもとづく活動によって『よりよい社会』の実現を企図する宣言である」（渡辺 2007：105）と説明している。吃音者は、流暢に発話をできないだけで非吃音者より劣った存在として扱われてしまう。その結果、吃音を矯正することを強いられてきたこれまでの状況を打破するために、「吃音者宣言」は発表された。

『金閣寺』と「吃音者宣言」の20年の間に、金鶴泳が書した『凍える口』や遠藤周作が書した『彼の生きかた』など、吃音者が描かれた小説は出版されている。前者は吃音者を暗く内向的な性格の人物として描写しているが、後者は吃音を抱えながらも懸命に生きていく前向きな姿が描写されている。また、吃音者宣言以後も井上ひさしの諸作品などが出版され、吃音者がいろいろな姿で描かれてきた。最近では自身も吃音者である重松清が2002年『きよしこ』や2007年『青い鳥』を出版している。『青い鳥』によれば、伝えたいという思いが強くなるほど、それを他者に語る際、いつもよりひどく吃ってしまう。しかしその告白を聞いた人は、吃音者の言いたいことはよくわかった、と口をそろえて言っている（重松 2007：140-4）。吃音者が吃りながら行った告白は聞き取りにくいにもかかわらず、聞き手がよくわかったというのはどうしてなのだろうか。また、吃音者が吃りながら何かを伝える姿は、何かを真剣に伝えようとしていると、聞き手には映る（重松 2007：97-8）。しかしそれは内容よりも、吃りながらも必死に伝えようとしているという告白の姿に注意が向いているからではないだろうか。このように吃りながら何かを伝えるという行為は、聞き取りにくい面と真剣に伝えようとしているように映る面との二面性を持っている。

現在に至るまで、吃音者はさまざまな描かれ方をしてきた。三島は「吃っていない私」が「吃っている私」を内在化しているという文体を確立し、それを徹底した。伊藤らの「吃音者宣言」では、吃音矯正の強制力を弱めようとした。しかし、宣言はしたものの、矯正したいと思う吃音者が多くいたことや、そういった吃音者への説明が徹底されなかったことにより、十分な成功を得ることはできなかったのではないだろうか。重松は、吃音者の告白は聞き取りにくい、真剣に伝えようとしているように映るといふ、吃音者像を提示した。『アサツテの人』では、どのように吃音や吃音者が描かれているのだろうか。次節ではそれを検討していく。

### 3 吃音の行方

『アサツテの人』という作品は、吃音者で失踪中の叔父の手記や、語り手である私（以下“私”と記す）が書いたそれらにまつわる批評を配列したものである。本節ではまず、叔父の吃音がどのように描かれていたのかを検討してゆく。

僕は、長いこと「啄木鳥」という単語を発音することができなかった。

第一音が「キ」であること、つづく第二音が「ツ」であること、「啄木鳥」はまるで誰かが僕の吃音癖を調べつくし、研究実験を繰り返した結果生み出されたような、寸

分の隙もない恐ろしくも完璧な単語だった。

僕は五十音の行のなかで、わけてもカ行とタ行を、そして段ではイ段とウ段の発声をもっとも苦手としていた。吃りの人間にはこのように、苦手な音とそうでない音がある。会話の途中で苦手な音に突き当たると、とっさに言葉の言い換えをしたり、もごもごと語尾を濁して吃りを避けようという心理がはたらく。

僕には殊に、タ行の「チ」と「ツ」がもっとも警戒すべき音だった。この二音はタ行の他の三つの音と種類を異にしていることを、僕は吃音児の勘できわめて早期から意識していた。本来なら「タ、ティ、トゥ、テ、ト」となるべきタ行のうちに、なにゆえにそのような他者が混入されているのか僕にはずっと疑問だった。これらに遭遇するたび、まるで熟れた富有柿の中に硬い種を噛み当てたような、ゴロリとする異物感を僕は覚えた。

(諏訪 2007 : 88-9)

上記の引用は叔父の手記に書かれた少年期の回想である。吃音に苦しむ姿は他の箇所にも見受けられ(諏訪 2007 : 96-8)、叔父の人生が吃音を中心に回っていたことが確認できる。幼少期から思春期にかけて吃音に苦しんでいた叔父は、その頃から言葉に異様な興味をもち、それをういて奇妙な振舞いをしていた。その一つが“私”の祖父、すなわち叔父の父が「ポンパ」ということばを口にしていて、それを叔父がまねていたことである。その「ポンパ」ということばは「耳につきやすいくせに、それ自体に意味を持たぬ言葉」(諏訪 2007 : 76)である。さらには、叔父はお経を誦んじるのが得意であり、その中の一節「おんあぼきやーべーろしゃの一まかぼだら一まにはんどまじんばらはらばりたやうん」という呪文のような一節をことあるごとに口ずさんでいた(諏訪 2007 : 77-8)。言葉への異様な関心をもつ叔父が、吃音者であるということを自覚し、発話の際に抱く恐怖について、以下のように述べている。

思うに、吃音者の恐れる最大の要素とは、語頭の一音にかかっている圧力の大きさである。この圧力とは、すなわち第一音の後に続く音列の総量に他ならない。「キツツキ」の場合、後続の総量とは「ツ・ツ・キ」の三文字分の重みのもので、これらが第一音である「キ」一文字に全体重をのしかからせている按配になり、このプレッシャーが舌を躊躇させるのだ。

(諏訪 2007 : 90)

ここに書かれている「プレッシャー」とは、『吃音の世界』(菊池 2019)にも書かれていた、「予期不安」のことを指す。予期不安とは話し出すと吃ってしまうかもしれない、というような未来への不安である。その不安を払拭し、吃ってもいいのだ、と思えれば、自分のことを受け入れられ、未来への不安も吃ってしまった過去の後悔もなくなる、と

菊池は述べていた（菊池 2019 : 210-1）。しかし『アサッテの人』ではどうだろうか。上記の引用に続く箇所では、吃らないようにするために歌うように「キーツツキー」と声に出し、次第に「キツツキ」という発音に近づけても失敗し、「酒に酔ったような啄木鳥しか飛ばせなかった」と叔父は手記に記している（諏訪 2007 : 91）。これは流暢に発話できなかつたことへの後悔をあらわしている。つまり、吃音者であった叔父は未来と過去への意識を強くもっているということになる。さらに、手記を記していたということからも、叔父は過去へ意識を向けがちであるということを確認できる。そんな叔父の吃音が 20 歳の冬に突如消えてしまう。その時を手記で以下のように回想している。

自分の思い違いに気付きはじめたのは、吃音が消えてからおおよそ半年近く経ったころだった。

僕の期待はものの見事に裏切られた。その世界は、僕の予想していたような住心地の良い場所ではなかった。たしかにキツツキは飛び来たり、僕の窓辺に休んだのだが、その窓には鉄格子が嵌まっていた。

一度世界に迎え入れられ、世界に準じた正当な言語感覚を身に付けてみると、これまでお互いに距離をとってきたそれら異族の言葉が、まるで堰を切ったようにぼくの身体に押し寄せ、付着し、ある常軌を逸した不快な肌触りとなって、いきおい僕を苛みはじめたのである。

少年のころ偉大な統一と見えたもの、それは世界の本質を構成し、機能させるところの、ある種の文法に他ならなかった。僕が死にもの狂いで手に入れようとした言葉のリズム、ある一定の波長は、そこへのチューニングが可能となった今、逆に僕をその律の内に緊縛し閉じ込めようとするものだった。

（諏訪 2007 : 102-3）

「少年のころの偉大な統一と見えたもの」は吃ることなく話せている世界を支配しているもの、すなわち「言葉のリズム」を表し、それを叔父は「鉄格子」や「常軌を逸した不快な肌触り」のものだとたとえている。吃ることからくる不安や後悔を払拭したにもかかわらず、新たに居心地の悪い異空間に飛ばされたような感覚を、叔父はもっているにちがいない。それは、現実世界に「常軌を逸した不快な肌触り」を感じていることから想像できる。だからこそ叔父は「アサッテ」を求めたのであろう。

「アサッテ」への希求を検討するうえで、まず、「チューリップ」男について述べておく。「チューリップ男」とは、叔父が官庁街のビルの地下管理事務所で、エレベーター技師として働いている時に、監視カメラ越しに出会ったサラリーマンのことである。そのサラリーマンは、誰もいないエレベーター内で突然逆立ちをしたり、コサックダンスをしたり、頭の上に両手でチューリップを作って目を閉じたり、性器を露出したりする男である。その男のことを、叔父は手記内で「チューリップ男」と名付けている（諏

訪 2007 : 112-4). そしてその男に関する手記で、叔父は初めて「アサッテ」への希求を露わにしている。それが以下の引用である。

彼は決して露出狂でも、二重人格者でもない。奇を衒<sup>てら</sup>ってあんなことをしているのではない。彼は、つまり、僕の言葉でいえば、世界の外、あの「アサッテの方角」に身をおかわそうとしているのだ。

(中略) システム化された勤務時間内に偶然生まれるわずかな裂け目、それがつまり無人のエレベーターというわけだろう。彼はその間隙<sup>かんげき</sup>を見逃さない。特異なパフォーマンスを、人知れず行なうことで、彼は瞬間的に、余人のうかがい得ない「アサッテ」を垣間見るのである。

(諏訪 2007 : 114-5, 下線は原文では太字であった部分に付加されている)

この引用で使われている「アサッテ」は、明らかに空間的な意味のものである。先行論文では「アサッテ」を以下のように定義している。

「語り手」は小説という形式が要求してくる「定型」を常に意識しながら書いていった。さらに、その意識をそのまま示したり、書きかけの原稿や、日記などの資料を提示するなどの方法で、小説の「定型」からの逸脱の可能性を逆説的に体現して見せた。だが、結局小説自体が壊れることはなかった。小説の「定型」という現実に来るだけテンションをかけてみせることによって、その逸脱の可能性を示そうとし、それでも小説の「定型」を壊さずに終わること。これは、叔父のやりたかった「アサッテ」の姿なのではないか。

(疋田 2019 : 77)

疋田は、叔父のやりたかった「アサッテ」の姿を、“私”が小説の「定型」を逸脱しようとしていることで説明をしようとしている。そして、テキストに忠実に「アサッテ」をとらえようとしている。しかし、本論はこの方法に与しない。小説の構造から「アサッテ」を分析するのではなく、叔父の手記内での記述を“私”がどのように受け取り、作者諏訪がどのように描いているのかということを念頭に置いて分析していく。

本論文では、「アサッテ」を時間的かつ空間的にとらえる。空間的な「アサッテ」とは、先の引用のように、日常に不意にあらわれる隙間のことである。それは集団化し組織化してしまった社会、つまり統一的になってしまった社会の中にふとあらわれる安息の時間を過ごせる空間なのである。「チューリップ男」を例に考えてみると、頭の上に両手でチューリップを作って目を閉じたりする行為は、一人になった時にだけ行っている。所属している集団に帰するときには何事もなかったかのように、普段の自分を演じている。「チューリップ男」が身をおかわそうとしている「アサッテ」とは、息抜きがで

きる時間ならびに、そのような空間なのではないだろうか。そうであるならば、叔父にとっての「アサッテ」とはどのような時間であり空間なのか。また、「私」があらわそうとしている「アサッテ」とはどのような時間であり空間なのか。また、諏訪があらわそうとした「アサッテ」とはどのような小説世界なのだろうか。そのことについて、次節で検討していく。

#### 4 「アサッテ」の哲学的考察

叔父にとっての「アサッテ」とは、吃音の消失後にあらわれたものである。それをここでは、吃音が時間的かつ空間的な「アサッテ」へ転移している、と表現する。本節では、時間的かつ空間的な「アサッテ」について分析していく。

吃音が「この世界の中で発声されるべきでない言葉（同頁：引用者註：先の 102-3 の引用と同じ頁）」であったように、「世界には定式に<sup>かな</sup>適った言葉とそうでない言葉が存在する。」と叔父は書いている。「定式に適う」とは、その言葉が発声者によって言い出されるべき時機を弁えられている、とでもいった意味であろう。（中略）

叔父の言うこともわからないではないが、実際にはわれわれの言語活動は、そのような狭隘な領域を無意識裡に選び取りながら行われていることも否めない事実ではある。場面場面でその判断が下され、それが連続した澁みない言葉の流れをつくってゆく。この流れを踏み外した時、はじめて言葉は世界から放逐される。

（諏訪 2007：104-5）

この引用は、叔父の吃音消失の手記の後に配置されている，“私”の批評部分である。

「狭隘な領域を無意識裡に選び取りながら行われている」我々の言語活動の連続が作る流れというのは、吃ることなく話せている世界を支配しているもの、すなわち叔父が感じている「言葉のリズム」（諏訪 2007：103）である。「流れ」という言葉からもわかるように、言語活動を支配しているものを，“私”は時間的なものとしてとらえている。

一方で「アサッテ」について，“私”は「吃音を失った叔父は、しばらくしてもう一度自ら『吃音的なもの』を求めはじめたのではないか。そして、それが他ならぬ『アサッテ』誕生の瞬間だったのではないだろうか」（諏訪 2007：106）と推測している。すなわち、吃音が「アサッテ」に転移した瞬間である。さらに「アサッテ」という言葉を選んだ経緯については以下の引用の通りである。

そもそもこの小説<sup>6)</sup>のタイトルにもある「アサッテ」なる語は、この日の記述<sup>7)</sup>に現われたものを嚆矢とする。これ以前にも、先に引用した吃音についての箇所「ねじれの空間」という形容が見られ、叔父にとって両者は、ほぼ同様の概念を含み持つと思われる。後者の「ねじれ」とは恐らく、私なども学校の幾何の時間に習った「ね



じれの位置」という言葉のあの「ねじれ」の謂<sup>いい</sup>で、ある基本軸に対して垂直でも平行でもなく、永遠に交わることもない線分の配置などをいう。図示された線分は基本軸から離れた空間上を、全く馬鹿々々しいほど無関係な様子で、まるで傾いた一本の浮子<sup>うき</sup>のように漂っている。

私が両者のうち「アサッテ」のほうを採用した大きな理由は、この言葉自体にある種の方向性<sup>ベクトル</sup>、絶えず一カ所にとどまるのを嫌い移動し続けようとする運動的なニュアンス<sup>はら</sup>が孕まれていることに尽きる。

(諏訪 2007 : 117)

“私”の憶測ではあるが、叔父が「アサッテ」と「ねじれの空間」を同様な概念を含む術語として使っていたと考えられることから、叔父は「アサッテ」を空間的なものとしてとらえていた、ということを確認できる。さらに、叔父の手記に書かれた詩の一部を引用する。以下は、吃音消失後に書かれたと推測される詩であり、その後の世界について以下のように記している。

ここは在り得ぬ世界  
 一瞬のカタストロフの  
 永続的な引き伸し  
 段を踏みはずした音符たちの  
 最後に行き着く安息の寝床  
 宙を舞う彼らは軽く軽く  
 いつしか休符となって降り積もる――

(諏訪 2007 : 127)

吃音が消失した「アサッテ」の世界は、吃音が転移したものであり、「最後に行き着く安息」の空間としてとらえることができる。

さらに“私”は叔父のいう「アサッテ」を運動的な概念としてとらえ、ショウペンハウアーなどの思想に傾倒したという叔父の手記(諏訪 2007 : 118-24)の後に以下のようなことを記している。

言語障害による「世界から疎外されている」という意識。

そしてショウペンハウアー風な「世界に囚われている」という意識。

まだ吃音が幅を利かせていた頃の叔父のうちには、この両者が矛盾し合いながら併存していた。より正確に言えば、一方が他の一方を制御するという相互的な危うい均衡を保っていた。彼の青春期の群像がこの奇妙な均衡によってかたちづくられていたのである。

その叔父に、吃音消失というあの一大転機が訪れた。均衡が崩れ、世界の抑圧が彼に押し寄せ、彼をさらい、呑み込んだ。彼は律に囚われて、窒息するような苦しみを味わうことになったであろう。どこか外へ、そんな切実な衝動がたびたび彼を襲うようになるのは必然であった。

(諏訪 2007 : 125)

吃音が消失し、「律に囚われてしまった」叔父が置かれている場所について、“私”が上記のように説明している。ここで叔父の手記(諏訪 2007 : 119-20)にも、上記の引用にも書かれていた「ショーペンハウアー風な『世界に囚われている』という意識」について、考えてみる。ショーペンハウアーの時間論について、中島義道は以下のようにまとめている。

ショーペンハウアーの時間論はこのうえもなく鋭い洞察に基づいている。それは、〈表象としての世界〉を支配する物理学的時間と〈意志としての世界〉を支配する〈今〉とが通約不可能であるという洞察である。時間の了解とはこの二重性の了解そのものであり、それを結合することではないのだ。だが、彼がこう言えるのは、その果てに「時間の消滅」という最終段階が控えているからである。

(中略) われわれは、過去との関係で現在を捉えるという図式にどっぷり漬かっている。過去世界の相貌と、とはまるで違うのに、それが同一の世界であるかのようにみなしている。この強引な同一視こそ、あらゆる「認識」の基本である。したがって、過去世界をショーペンハウアーの言うように真の意味で「幻想」と実感できれば、それとの関係における現在もまた「幻想」として自覚されよう。そのとき本来的な〈今〉がふと足もとに開けてこよう。それは絶対的な意味の今であり、すなわち時間の消滅である。

(中島 1999 : 203-4)

ショーペンハウアーのいう「時間の消滅」とは、過去も未来も今に収束するということである。そのことについてショーペンハウアーは、以下のように説明している。

たえず生成し消滅するものは、すでに過去にあったか、未来にやって来るかのいずれかで、これは現象そのものに属し、現象の形式を介して生成と消滅とが可能になるのである。であるから、「過去にあったものは何か？」——「今あるものがそれである」——「未来にあるものは何であろうか」——「過去にあったものがそれである」という具合に考えてみるのがいい。そしてこれを言葉の厳密な意味に解して、ということつまりこれを類似のものと理解するのではなしに同一のものとして理解してみるのがいい。意志にとっては生命ほど確かなものはなく、生命にとっては現在ほど

確かなものはないからである。ここから誰でも次のように言い得るわけなのだ。「わたしはいずれにしても現在の主人である。それにこの現在は未来永劫にわたって影のようにわが身につきまとうであろう。だからわたしは、現在がどこから来たにせよ、またいかに成り行くにもせよ、その現在がまさに今あるというそのことを不思議とは思わない」……

(Schopenhauer 1844=1975 : 510)

未来も過去も、今に収束してしまう世界とは、叔父にとっては窮屈だったに違いない。未来と過去の両方に存在する吃音の恐怖に囚われ、吃音消失後は「偉大な統一」(諏訪 2007 : 103) に囚われ、今という時間から逃げられなくなってしまった。そんな叔父が、安息の時間が過ごせる空間である「アサッテ」を希求するのは、“私”も記していたように(諏訪 2007 : 125)、当然の帰結であろう。

ここでやっと、「アサッテ」とは、時間的かつ空間的な概念をふまえたものとして作品内で作用していると証明できる。すなわち今存在している自分自身をそのまま受け入れるのではなく、つまり時間に囚われるのではなく、また場所を移すという空間の移動でもなく、安息を求めて姿を消すという行為を成し遂げた「アサッテの人」として、諏訪は、叔父を描き、“私”にそれを批評させてきた。それは「アサッテ」が明後日でもなく、明後日の方角をさすものでもないこと、つまり時間でも空間でもなく、消滅という作用を指していることの証拠である。よって、時間的かつ空間的な「アサッテ」をふまえて、さらにその上に消滅作用としての「アサッテ」を配置しているのだ。そしてそれは、作品の末尾にも表れている。

とはいえ六年前の私ならば、本稿を読み返して、おそらくは次のような加筆の可能性に食指を動かされたはずである。

- ・私と叔父のリアルタイムでの対話
- ・叔父と朋子さんのスケッチ以外での生活の様様
- ・叔父とチューリップ男との劇的遭遇
- ・叔父と悪童たちとの奇妙な交流
- ・叔父の旅の行先とそこでの奇行 ……

こうした加筆をすべて放棄して、私はいま、ここに小説の筆を擱く。  
叔父の行方は依然として判らない。……

(諏訪 2007 : 168)

この後さらに追記が付せられているが、それは叔父の奇行の具体例を付け加えている

だけと判断するため、上記の引用が作品の末尾だと考える。「私」があらゆる加筆を放棄したにもかかわらず、「叔父の行方は依然として判らない. ……」と記しているのは、時間も空間も消滅した「アサッテ」に叔父は消えたということを強調していると考えられる。ゆえに「私」が表現しようとした「アサッテ」とは、時間も空間も消滅してしまう世界のことである。

## 5 おわりに

三島は「吃っている私」を内在化した、吃音者を描いた。「吃音者宣言」では、吃音矯正と戦う吃音者を救おうとしていた。金鶴泳が描く内向的な吃音者、遠藤周作が描く前向きな吃音者、重松清が描く懸命な吃音者。実に多様な吃音者が描かれてきた。それらの狭間に『アサッテの人』をおいてみると、それらのどれとも違い、哲学的で新しい吃音者像に気づかされる。つまり、時間的かつ空間的な「アサッテ」と関連付けられた吃音者像である。まず、時間的な「アサッテ」と関連付けられた吃音者像とは、今という時間に囚われた叔父の姿である。それは吃音の予期不安からくる恐怖や吃音消失後の「偉大な統一」（諏訪 2007：103）に囚われ、今という時間から逃げられなくなってしまった姿のことである。空間的な「アサッテ」と関連付けられた吃音者像とは、吃音が消失したにも関わらず、「吃音的なもの」に苦しめられているため、安息の空間を求めた叔父の姿である。囚われているものからの解放を願う叔父の姿は、どの吃音者像とも異なる。時間的かつ空間的な「アサッテ」という通奏低音から逃れるために、叔父は失踪した。叔父が吃音や「吃音的なもの」との共生から逃げ、誰の手も借りずに解放を願っているところに、これまでの文学作品に描かれてきた吃音者とは違う、新しさがある。

叔父とはまさに特異な吃音者であった。そしてその特異さに、新しき吃音者像が確認できる。吃音や吃音的なものを行動原理に据えて、叔父という人物は描かれている。さらにその叔父を「アサッテの人」と称している。これは、今という時間にとらわれすぎている吃音者を解放する方法なのではないだろうか。時間というのは無限に反復されるものである（Deleuze 1968=2007：258）<sup>8)</sup>。吃音における諸反復をも克服する実践として、『アサッテの人』の吃音者・叔父は描かれているのだ。まさに小説にしかできない、挑発的な吃音者像を提示している。

今後は、『アサッテの人』での新しき吃音者像や、谷川俊太郎や草野心平の詩にみられる言葉あそびという範疇での吃りのような表現<sup>9)</sup>などを視野に入れていく。そしてそのような吃音者が、日常生活での吃音とどのように向き合い、どのように解放されようとするのかを検討するのが、喫緊の課題である。



- 疋田雅昭, 2019, 「隠された審級あるいは捏造する語り手——諏訪哲史の『アサッテの人』をよむ」『明星大学全学共通教育研究紀要』1: 61-79.
- 廣野由美子, 2005, 『批評理論入門——「フランケンシュタイン」解剖講義』中央公論新社.
- 井上ひさし, 1980, 『花石物語』文藝春秋社.
- 伊藤伸二編, 1976, 『吃音者宣言——言友会運動十年』たいまつ社.
- 菊池良和, 2019, 『吃音の世界』光文社.
- 金鶴泳, 1970, 『凍える口』河出書房新社.
- 国立障害者リハビリセンター, 2012, 「吃音について」, (2019年10月19日取得, <http://www.rehab.go.jp/ri/kankaku/kituon/>)
- 熊倉千之, 2008, 「『アサッテの人』の誤読」『ソフィア——西洋文化ならびに東西文化交流の研究』56(3): 74-91.
- 草野心平, [1928] 2010, 『草野心平詩集』角川春樹事務所.
- 三島由紀夫, 1956, 『金閣寺』新潮社. (再録: 2001, 「金閣寺」『決定版三島由紀夫全集 6』新潮社, 7-274.)
- 中島義道, [1994] 1999, 『時間と自由』講談社.
- 大澤真幸, 2018, 『三島由紀夫——二つの謎』集英社.
- 佐藤秀明, 1994, 「『金閣寺』論——対話することばの誕生」『日本文学』43(1): 37-47. (再録: 2000, 「『金閣寺』論」『日本文学研究論文集成 42』若草書房, 119-35.)
- Schopenhauer, Arthur, 1844, *Die Welt als Wille und Vorstellung*. (西尾幹二訳, 1975, 「意志と表象としての世界」『世界の名著 10 ショーペンハウアー』中央公論社, 101-745.)
- 重松清, 2002, 『きよしこ』新潮社.
- 重松清, [2007] 2010, 『青い鳥』新潮社.
- 諏訪哲史, [2007] 2010, 『アサッテの人』講談社.
- 谷川俊太郎, 1973, 『ことばあそびうた』福音館書店.
- 渡辺克典, 2004, 「吃音矯正の歴史社会学——明治・大正期における伊沢修二の言語矯正をめぐる」『年報社会学論集』17: 25-35.
- 渡辺克典, 2007, 「『吃音者宣言』の歴史的背景とその位置づけ」『社会言語学』7: 103-6.

